

文献からみる江戸時代における「荘子」研究

連, 清吉

<https://doi.org/10.15017/2328476>

出版情報：哲學年報. 52, pp.203-221, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



文献からみる江戸時代における『莊子』研究

連

清せい

吉きち

一

日本に『莊子』が輸入されたのはいつごろであったか明瞭な記録はないが、目録によると、平安朝の初期にできた『日本国見在書目録』に、司馬彪註二十卷、郭象註三十三卷、成玄英疏十卷等十数種をあげているから、当時いかに多くの『莊子』注釈書が伝えられてきたかがわかる。現存最も古い『莊子』の写本は高山寺所蔵の郭象註『莊子』残巻七巻であり、これは鎌倉時代の書写であると推測される。そうすると、平安朝から鎌倉時代にかけて広く読まれた『莊子』は郭象註であろう。では、江戸時代においては、『莊子』のどのようなテキストが中国から入ってきたのであろうか。そして日本においてはどうか研究されたのか、ということが非常に興味深い。そこで、目録などの文献によって探究したいと思う。^①

二

慶応大学斯道文庫で編集された『江戸時代書林出版書籍目録集成』^②によると、『莊子』の注釈書の刊行については、次のようになっている。

寛文十年（一六七〇）

莊子虞齋 林希逸註

同頭書

同抄

同註疏

同三註大全

老莊翼註

寛文十一年（一六七二）

莊子虞齋 林希逸註

同頭書

同抄

同註疏

同三註大全

老莊翼註

延宝三年（一六七五）

莊子口義 林希逸口義

同頭書 熊谷立節

同抄

莊子註疏 晋郭子玄

十冊

十冊

十冊

十三冊

二十一冊

十八冊

十冊

十冊

十冊

十冊

十三冊

二十一冊

十八冊

十冊

十冊

十冊

十冊

十三冊

文献からみる江戸時代における『莊子』研究

莊子三註大全	二十冊
老莊翼註 北海焦弱侯編訂 建業王元貞閱	十八冊
採古今註解而解	
延宝三年(新增書籍目録)	
莊子 林希逸註	十冊
同首書 熊谷立節	十冊
同抄 松永昌三	十冊
莊子註疏 成玄英	十三冊
莊子大全 瀨秀水、会魁陳懿典輯	二十一冊
莊子棧航口義	十一冊
天和元年(一六八一)	
莊子 林希逸	十冊
同首書	十冊
同抄	十冊
莊子註疏	十三冊
莊子大全	二十冊
貞享二年(一六八五)	
莊子口義	十冊
同頭書	十冊

同抄

莊子註疏

十冊
十三冊

莊子三註大全

二十冊

老莊翼註

十八冊

莊子棧航口義

十一冊

元祿五年（一六九二）

莊子口義

十冊

同首書

十冊

同抄

十冊

莊子註疏 晋郭子玄、唐成玄英作

十三冊

莊子三註大全

二十冊

莊子棧航口義

十一冊

老莊翼註

十八冊

元祿九年（一六九六）

莊子口義 林希逸

十冊

同首書

十冊

同抄

十冊

莊子註疏 唐成玄英

十三冊

莊子三註大全 澗秀水、会魁陳懿典輯

二十一冊

文献からみる江戸時代における『莊子』研究

莊子棧航口義	十一冊
元禄十二年(一六九九)	
莊子口義 林希逸	十冊
同首書	十冊
同抄	十冊
莊子註疏	十三冊
莊子三註大全	二十冊
老莊翼註	十八冊
莊子棧航口義	十一冊
宝永六年(一七〇九)	
莊子口義 林希逸	十冊
同首書	十冊
同抄	十冊
莊子註疏	十三冊
莊子三註大全	二十冊
莊子棧航口義	十一冊
莊子口義俚諺抄	二十一冊
莊子白文 訓点付	
正徳五年(一七一五)	

- | | | |
|-------------|--------|------|
| 莊子 | 林希逸註 | 十冊 |
| 同首書 | 熊谷立節 | 十冊 |
| 同抄 | 松永昌三 | 十冊 |
| 莊子註疏 | | 十三冊 |
| 莊子大全 | | 二十冊 |
| 莊子棧航口義 | | 十一冊 |
| 莊子口義俚諺抄 | | 二十一冊 |
| 莊子 | 白文 訓点付 | |
| 享保十四年(一七二九) | | |
| 莊子口義俚諺抄 | 僅内篇 | |
| 莊子 | 白文 訓点付 | |
| 明和九年(一七七二) | | |
| 莊子因 | 林雲銘 | |

江戸時代の書林における『莊子』の出版の状況からみれば、郭註・成疏の『莊子註疏』は依然として十七世紀中期から十八世紀にかけて、つまり江戸初期に流行していたわけで、なお便宜上のため、集註の形になった焦弱侯の『老莊翼註』や、陳懿典の『莊子三註大全』も刊行され、とくに注目すべきのは、林希逸の『莊子口義』が出版されただけでなく、いろいろな形、例えば頭書、首書、俚諺抄を加えて、書写して広く伝えられていたのである。江戸初期以降、『倭版書籍考』に、

(莊子) 口義、南宋の儒者林希逸作る所と為る。……口義の倭訓は初めて羅山先生より出ず。

と載せるように、林羅山が『莊子口義』に訓点を付け、これを徳川初期に出版した。それ以来、ついに林希逸の『莊子口義』が『莊子』理解のテキストとして広く読まれたのである。^④

十八世紀初期以後、書林が新しい研究成果や学問方法をみつけようとした学者の要望に対応しようという心持ちがあったからであろうか、『莊子』の新しい注釈書も中国より渡来してきた。これは上述の『江戸時代書林出版書籍目録集成』に、「明和九年、莊子因、林雲銘」と載せられたが、大庭脩が編集した『江戸時代における唐船持渡書研究』^⑤でも『莊子』の注釈書を集めてある。その中では林西仲『莊子因』のほか、明代と清代の『莊子』の注釈書も収集されるのである。そこには以下の通りである。

宝永二年（一七〇五）

増補莊子因

一部四本

宝永六年（一七〇九）

老莊通義

一部十二本

享保八年（一七二三）

南華経解旁註

一部八套

享保十年（一七二五）

莊子因

一部一套

文元四年（一七三九）

老莊翼

一部一套

(以上『商舶載来書目』^⑥による)

寛延三年（一七五〇）

莊子因 一部一套

（以上『唐船持渡書覚書』^⑥による）

宝曆四年（一七五四）

莊子因 一部一套四本

老荘精解 一部一套四本

（以上『舶来書籍大意書』^⑦による）

老荘精解 一部一套

宝曆六年（一七五六）

莊子独見 一部一套

宝曆七年（一七五七）

莊子故 一部一套

宝曆十年（一七六〇）

南華経解 一部二本

寛政九年（一七九七）

莊子解 一部一套

（以上『商船載来書目』による）

寛政十二年（一八〇〇）

増註莊子因 一部一套

(以上『外船齋来書目』^⑧による)

弘化四年(一八四七)

南華経 一部一巻

嘉永三年(一八五〇)

老莊解 一部一巻

(以上『唐船書籍元帳』^⑨による)

ここで、弘化四年の『唐船書籍元帳』にみられる『南華経』は郭象の『莊子註』であろうが、そのほか、全て明、清の『莊子』注釈書である。しかし、林希逸の『莊子口義』は全然みられない。これは、恐らく林希逸の口義が日本に於いてすでに知られているので、中国から輸入する必要がない、もしくは中国において、『莊子』を理解する根拠である郭象の註や、江戸初期以来広く読まれた林希逸の口義は、この時代にきて、余りにも面白さを欠くと考えられたからであろう。更に、この時期にある「批判的受容」という学術風尚の影響もあつたようからである。だから中国で新しく刊行された『莊子』の注釈書を輸入して、それを参考にしながら、あらためて『莊子』を奥深く解釈しようとしたのだと思われる。^⑩

三、

林羅山が林希逸の『莊子口義』を標点し、江戸時代における『莊子』を研究する端緒を開いて以来、『慶長以来諸家著述目録』、『近世漢学家著述目録』、『漢学者伝記及著述集覧』、『国書総目録』等の記載によれば、江戸時代における『莊子』の研究書目は、九十幾つかに及んだ。これによりながらそのおおよそのことを次のように摘録しておこう。

⑩

書名	著者	学派	存佚	出版年	刊行（現藏）
鰲頭莊子口義	林羅山	朱子学派	未見		拠『莊子口義棧航序』
眉批標点莊子註疏	林羅山	朱子学派	未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』 ^②
頭書莊子	菅得庵	朱子学派	未見		拠『倭版書籍考』
莊子抄	松永尺五	朱子学派	存	正保二年	静嘉堂文庫
莊子叢話	那波活所	朱子学派	未見		拠『著述目錄大成』 ^③
頭書莊子口義	熊谷活水		未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子口義抄	不詳		存	寛文十年	国立国会図書館
莊子口義棧航	小野壹	朱子学派	存	延宝九年	無求備齋老列莊三子集成補編 ^④
翻刻標点莊子翼	小出永庵		未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
修身奇語田舎莊子	佚齋雲山		存	享保十一年	岩波書店（新日本古典文学大系）
繪図都莊子	信更生		未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子口義俚諺抄	毛利貞齋		存	文祿十五年	九州大学文学部図書館
莊子国字解	荻生徂徠	徂徠学派	存	明治三十七年	漢籍国字解
校訂郭註莊子	服部南郭	徂徠学派	存	元文四年	九州大学図書館
考訂莊子音義	服部南郭	徂徠学派	存	元文四年	同右
莊子口義愚解	渡辺蒙庵	徂徠学派	存	宝曆十二年	国会図書館
莊子国字解	南霞主人		未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子郭註紀聞	五井蘭洲	朱子学派	存	不詳	静嘉堂文庫

文献からみる江戸時代における『莊子』研究

書名	著者	学派	存佚	出版年	刊行（現蔵）
莊子翼解	角田青溪	折衷学派	未見		拠『著述目錄大成』
莊子通義	渋井太室	朱子学派	未見		拠『伝記著述集覽』 ^⑥
校訂増註莊子因	渾暉辰		未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子闕誤同異考	渾暉辰		未見		同右
莊子雕題	中井履軒	朱子学派	存	明治十一年	無求備齋老列莊三子集成補編
莊子考	戸崎淡園	徂徠学派	未見		拠『著述目錄大成』
訓点郭註莊子	千葉芸蘭	徂徠学派	未見		拠『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子摘腴	本居宣長	国学	存	宝曆六年	天理図書館
莊子類考	片山兼山	折衷学派	未見		拠『伝記著述集覽』
莊子筌	重野棹軒	折衷学派	未見		拠『著述目錄大成』
莊子釋解	皆川淇園	折衷学派	未見		拠『伝記著述集覽』
読莊子	市川鶴鳴	徂徠学派	未見		拠『著述目錄大成』
郭註莊子覈玄	杜多秀峰	徂徠学派	存	文化元年	無求備齋老列莊三子集成補編
標註訓点莊子	小田穀山	折衷学派	未見		拠『著述目錄大成』
莊子機註	冢田大峰	折衷学派	未見		拠『伝記著述集覽』
莊子考	萩原大麓	折衷学派	未見		拠『著述目錄大成』
莊子独了	亀田鵬斎	折衷学派	未見		同右
莊子拮解	亀田鵬斎	折衷学派	未見		同右

書名	著者	学派	存佚	出版年	刊行（現蔵）
莊子文訣	馬淵会通		存	不詳	国会図書館
莊子訳説	鎌田柳泓		未見		拠『国書総目録』
莊子考	大菅南坡	徂徠学派	未見		拠『著述目録大成』
莊子解	海保漁村	徂徠学派	未見		同右
莊子聞書	伴徒義		未見		拠『伝記著述集覧』
莊子解	伴徒義		未見		同右
莊子十論	米谷金城		未見		拠『著述目録大成』
莊子解	久保筑水	折衷学派	未見		同右
補義莊子因	秦鼎	徂徠学派	存	寛政八年	和刻諸子集成
城山手批莊子	中山城山	徂徠学派	未刊		拠『周秦漢魏諸子知見書目』
莊子神解	葛西因是	朱子学派	存	文政五年	京都大学図書館
莊子増註	巖井文		存	明治二十六年	早稲田大学図書館
莊子集註	巖井文		存	明治二十七年	国会図書館
莊子弁疑	三宅橘園	折衷学派	未見		拠『伝記著述集覧』
莊子解	金子鶴村	折衷学派	未見		拠『著述目録大成』
莊子独断	鳥海松亭	朱子学派	未見		同右
莊子叢音	亀井昭陽	徂徠学派	存		慶応大学斯道文庫
莊子瑣説	亀井昭陽	徂徠学派	存		九州大学図書館

文献からみる江戸時代における『莊子』研究

書名	著者	学派	存佚	出版年	刊行（現蔵）
莊子解	帆足万里	独立学派	存	大正十五年	帆足万里全集
郭註莊子標注	東条一堂	折衷学派	未見		抛『著述目錄大成』
莊子道德字義並性命	東条一堂	折衷学派	存	不詳	東北大学狩野文庫
解莊	宇津木昆台		存	明治十五年	九州大学文学部
莊子覆言要言	三野謙谷		未見		抛『著述目錄大成』
莊子全解	堤它山		未見		同右
莊子詮	堤它山		未見		同右
莊子文抄	齊藤鑾江	朱子学派	未見		同右
莊子解	仁科幹	折衷学派	未見		抛『伝記著述集覽』
莊子解	大田晴軒	考証学派	未見		抛『著述目錄大成』
莊子集覽	中井乾齋	考証学派	未見		同右
標注補義莊子因	東条保		存	明治二十三年	和刻諸子集成
莊子問答	栗原如心		未見		抛『周秦漢魏諸子知見目錄』
莊子虚字類聚	岡本保孝	考証学派	存	不詳	尊経閣
莊子解	昭井全都		存	昭和四年	日本儒林叢書
莊子說	昭井全都		存	抄本	無求備齋老列莊三子集成補編
莊子考	岡松麿谷	独立学派	存	明治四十年	同右

以上の目録の記載をみると、江戸初期、つまり十七世紀後半から十八世紀の半ばにかけての百余年間には、日本の『莊子』研究は、依然として五山時代の風習を引きついで、郭象の『莊子註』と成玄英の『莊子疏』を標注訓点に加えるのであるが、この時期に、最も重視されるのは、林希逸『莊子口義』の研究であり、そのほか、口語体の形によって『莊子』を通俗的でわかりやすく解釈する書物も出版されることのである。そして、十八世紀の後半になって、古学派の学者は朱子学によらずに直接中国古典、とりわけ『論語』の真義を探究するにもかかわらず、荻生徂徠をはじめ古文辞学派一門が国字解に心血を注いでいったことこそ本土文化意識を示すもので、この時期の『莊子』研究は、改めて郭象の『莊子註』を注視しつつ、『莊子』の国字解をも生み出すものであった。前者の代表作は服部南郭の『校訂郭註莊子』や千葉芸蘭の『訓点郭註莊子』であり、後者のは荻生徂徠の『莊子国字解』や本居宣長の『莊子摘腴』である。

さて、十八世紀以後、学界の流れはかわつてきたが、それは依然として郭象『莊子註』を訓点付けで研究しつつも、新たに伝わってきた林西仲の『莊子因』に校訂や補注など手を加えて盛んに研究されたことである。ところで、この時期における『莊子』研究は如何に自分自身の解釈構造を立てるかが眼目であったことに注目すべきである。つまりこの頃の『莊子』研究の内容を考えると、中国の注釈を引き受けながら、自分の見方も示したもので、例えば亀井昭陽『莊子瑣説』や帆足万里『莊子解』の如くである。

四

『日本国見在書目録』の所載によると、平安時代にはすでに郭象『莊子註』を伝えてきた。しかし、江戸時代になつて、林羅山は、

本朝昔註疏を読み、口義を見ず。南禅寺巖惟肖は、始めて口義を読む。今時往往にして人皆これを見るを得。
 (『林羅山文集』卷三・答祖博)

と述べた。つまり、五山時代の南禅寺僧惟肖が林希逸の『莊子口義』によって『莊子』を研究する前、『莊子』を読む場合は郭象の『莊子註』を基準としたが、僧惟肖と林羅山は『莊子口義』を重視してから、江戸初期における『莊子』研究は、『莊子口義』を頭学としたのである。そこで、林羅山は次のように述べている。

本朝古来老莊を読むものは、老は則ち河上公を用い、莊は則ち郭象を用い、列は則ち張湛を用いて、しかるにいまだかつて希逸に及ぶものあらず。近代南禅寺沙門岩惟肖かつて莊子を耕耘老人明魏に聞き、しかるのち惟肖始めて莊子希逸口義を読む。爾来比比にしてみなしかる。しかりといえども、いまだ老子希逸口義に及ばず、今人に至りてみな河上による。(『林羅山文集』卷五十四・老子口義跋)

つまり、平安時代以来、道家の老、莊、列三子の研究は中国本場の学問のままに従うが、惟肖が林希逸の『莊子口義』を講読して以来、ついに郭象の『莊子註』に変わって林希逸の『莊子口義』が広く読まれてきたのである。だから、慶応大学斯道文庫が編集した『江戸時代書林出版書籍目録集成』によってみると、寛文十年(一六七〇)から正徳五年(一七一五)にかけての四十五年間、世間に刊行して伝わった『莊子』の注釈書は、郭象の註と林希逸の口義と焦弱侯の翼註があつたのであるが、『近世漢学者著述目録大成』の記載にみれば、この時期における学者の『莊子』研究は殆ど林希逸の口義への訓点や標注や俚諺抄などの付け加えなのである。以上が江戸初期の『莊子』研究の概観である。

十八世紀半ば以後、徂徠をはじめ古文辞学派の学者は朱子の集註は『論語』と『孟子』との真義を把握できないと批判した。したがって、徂徠学派は林希逸『莊子口義』が儒家思想や仏教を引用しながら『莊子』を説明することは『莊子』の本義を理解できないこととして批判した。徂徠の弟子である太宰春台は次のようにいっている。

宋儒の愚ものは、当に林希逸を以て最もと為すべし。それ老列荘のため口義を著すは、往々にして傳會するに釈氏の説を以てす。また時に吾聖人の道を以てこれを較ぶ。それ三子の道と為す所以は吾聖人と皆その指に異なる。間同じき如きものと雖も、但しその末のみ。希逸これを見て、因りてこれを合一せんと欲す。所謂その本を揣さずにしてその末に齊するものなり。既に三子を知らず、また釈氏の道を知らず。況んや吾聖人の道をや。

（『紫芝園漫筆』卷五）

大宰春台のいうところは、林希逸が老荘列三子の口義をつくる場合は、儒教や仏教によって三子の思想を説明している。つまり儒・仏・道三教一致の主張を強調するのである。しかし、三教それぞれ思想趣旨が食い違うので、もし儒、仏によって老荘の所説を注釈するならば、逆に老荘の本義を把握することはできない。このように太宰春台は、林希逸の三子口義は老荘列の真義を發揮できないと批判したのである。こうして徂徠学派が主張していた「批判的受容」は一時期盛んになるので、元禄十五年（一七〇二）に刊行された『倭版書籍考』にある『莊子註疏』の解題は次のように述べている。

（莊子註疏は）晋郭象の註、唐成玄英法師の疏なり。莊子の古註なり。莊子を見るに当に先註疏に依るべし。まさに只専ら林氏の古義を見るべからず。

当時の『莊子』研究では、ただ林希逸の口義だけに執着すべきでないことを示しているのである。したがって、徂徠の門下、服部南郭は『校訂郭註莊子』と『考訂陸徳明莊子音義』を撰述し、なお、後に千葉芸蘭も『訓点郭註莊子』をつくるのである。これによって、十八世紀初期の『莊子』研究の概ねは知られる。

一方、『近世漢学者著述目録大成』によると、徂徠の『国字解莊子』が世に問われて以来、日本の学者はいままで中国や日本にある註疏を引用しつつ、自分自身の見解を明らかに示している。^⑥例えば中井履軒の『莊子雕題』や亀井昭陽の『莊子瑣説』や帆足万里の『莊子解』などである。これも十八世紀初期における『莊子』研究の特色である。

なぜこの時期の学者は『莊子』を研究する場合、自分の見方を示すことができたのであろうか、これは十八世紀初期以後、中国から輸入してきた『莊子』の注釈書と関わりあることと思う。

さて、十八世紀初期以後、中国より渡来した『莊子』の注釈書に関しては、『唐船持渡書研究』が載せた資料によると、恐らく郭象の註や林希逸の口義は既に広く読まれていたので、改めて中国から輸入する必要がなかった。したがって、より新しい注釈書、つまり中国明、清の『莊子』註疏、例えば胡文英『莊子独見』や宣穎『南華精解』や林西仲『莊子因』などが伝わってきた。それによって、日本の学者は『莊子』を解釈するとき、元来あった郭象の註、林希逸の口義を引用しつつ、なおかつ明、清の注釈も参考して、中国における『莊子』研究の状況を理解したうえで、自分独自の見解を披瀝することができたのである。

以上に述べたことを要約すると、文献の記録によって、『日本国見在書目』には郭象の『莊子註』を載せているので、平安時代から郭象の註によって『莊子』を読んでいたことがわかる。ところが、五山時代になって、僧惟肖が林希逸の『莊子口義』を講読して以来、しかも『倭版書籍考』によれば、林羅山が林希逸の口義を訓点で付け加えたので、江戸初期には林希逸の口義が広く読まれたと述べている。その他の目録書を繰ってみると、多くの林希逸『莊子口義』の研究書が載せられているので、江戸初期における『莊子』研究は、殆ど林希逸の口義によることがわかる。また、この時期には、通俗的でわかりやすい『莊子』解釈も世間に伝わっていたようである。

十七世紀半ばになって、荻生徂徠が林希逸の『莊子口義』を批判して、また『莊子国字解』を著述して以来、古文辞学派の人々は林氏の口義を拒否して、かえって晋の郭象の『莊子註』を重視した。これによって、十七世紀のころ以後、改めて郭象の註で『莊子』を研究することが盛んになったのである。なお、国字解の『莊子』もこれより、いちだんと盛んに読まれるようになった。そして、十八世紀の始めに、中国明、清の『莊子』の注釈書が日本に輸入

されてきて、それに影響されて、日本の学者たちも、『莊子』を解釈に、自分独自の見解を示すようになってきた。以上のことをさらに要約して図示すれば、次のようになる。^⑥

	郭象註	俚諺抄	林希逸口義	明清注釈	国字解	独自見解
平安時代	◎					
五山時代	○		○			
江戸初期	○	◎	◎			
江戸中期以後	◎		○	◎	◎	◎

つまり、平安時代における『莊子』の理解は郭象の註による。五山時代から江戸初期にかけて、郭象の註は依然として読まれるが、本流として重視されるのは林希逸『莊子口義』である。ところが、江戸時代の中ごろ以後、『莊子』研究の流れは、さらに変わってきて、いわゆる林希逸『莊子』口義の勢いはやや衰えて、かえって郭象の註の復帰が目されるのである。そのほか、国字解や明、清の注釈や日本学者の独自の見解もこの時期に登場する。この時期が江戸時代における『莊子』研究の全盛期であり、高く評価されて然るべき時代であった。

註

- ① 日本における『莊子』研究については、武内義雄氏「日本における老莊学」(『武内義雄全集』第六卷・諸子篇)に参照。
- ② 昭和三十八年十月、井上書房発行。
- ③ 池田知久氏「日本における林希逸『莊子庸齋口義』の受容」(『二松学舎大学論集』31)に参照。
- ④ 昭和四十二年三月、関西大学東西学術研究所発行。
- ⑤ 『商船載来書目』は、国立国会図書館に現存している。元禄六年(一六九三)から享和三年(一八〇三)にかけての渡来書目

を記載するのである。

- ⑥ 『唐船持渡書覚書』は、宮内庁書陵部にある『船載書目』第十二冊所収。
- ⑦ 『舶来書籍大意書』は内閣文庫に所蔵。
- ⑧ 『外船齋来書目』は長崎県立図書館渡辺文庫所蔵。
- ⑨ 『唐船書籍元帳』は長崎県立図書館に所蔵。
- ⑩ 十八世紀末以後、独自の見解をもって『莊子』を解釈するものは、例えば中井履軒『莊子雕題』、亀井昭陽『莊子瑣説』、帆足万里『莊子解』などである。
- ⑪ 巖靈峰『周秦漢魏諸子知見書目』（台北、正中書局出版）に参照。表の並び方は、作者の生年順とするが、生卒年不詳の場合には刊年による。
- ⑫ ⑨に参照。
- ⑬ 『著述目録大成』は『近世漢学者著述目録大成』の略称である。
- ⑭ 巖靈峰氏が編集で、（台北）成文出版社から出版された。
- ⑮ 『伝記著述集覧』は『漢字著述集覧』の略称である。
- ⑯ 国字解のことは、町田三郎先生の「『漢籍国字解全集』について」（『東洋の思想と宗教』第九号）を参照。
- ⑰ 「◎」は当時の『莊子』研究の本流とし、「○」はその支流を意味する。